

## 質的研究における分析と解釈 (II)

——日記の書き手からみた社会的世界——

近 藤 敏 夫

〔抄 録〕

本稿の目的は、日記テキストをデータにして書き手からみた社会的世界を分析し、社会的世界に対する書き手の主観的態度を解釈することである。取り上げる日記は、大正期の地方都市金沢で象嵌職人が書き記したものである。分析方法として、まず A. シュッツの現象学的社会学を応用し、地域社会における社会的世界の構成を試みる。この段階の分析は、対象者の一次的意味構成を研究者が追構成することである。書き手の「いま、ここ」のパースペクティブから地域社会に生起する出来事を記述し、いくつもの領域から成る社会的世界の構成を整理する。つぎに、G. H. ミードの理論を応用して、地域社会におけるエートス、とくに対面的な人間関係で重視されるエートスを検討する。書き手にとって「他者の態度取得」をする相手とは誰か、また地域社会の「一般化された他者」の態度とは何か、日記に記述された相互行為を分析することによって、地域社会に存続してきたエートスを読み取る。研究者は日記を分析、解釈する際に、日記テキストを現在の視点から再構成する。この段階の分析、解釈は研究者による二次的意味構成に相当する。その際、書き手のパースペクティブを通して再構成される事実が、現在にとって客観的リアリティをもつと仮定する。書き手のパースペクティブを超えたところに客観的な過去の事実（真の過去）の存在を想定しない。

キーワード 日記, 社会的世界, 他者の態度取得, エートス

1. 日記分析の意義
2. 日記データベースの作成
3. 日記のコーディングとデータ群の抽出

以上, 第41号 (2005年9月刊) 所収

#### 4. 米澤弘安の生活史

本稿の目的は、日記から書き手の社会的世界の構成を試みることであるが、そのための準備として書き手の生活史を概観しておく必要がある。日記には家族の状況や社会状況が書き手の主観を通して記述されるのであるが、事実関係の整理のために日記に書かれなかった出来事を含めて生活史をまとめておこう。というのも、日記には書き手のパースペクティブに現れた出来事がすべて記述されるわけではないからである。何らかの意図や事情で書き手は選択的に記述を行っている。例えば、書き手の弘安は大正 6 年 11 月 6 日に結婚するが、結婚当日に結婚の記述はなく、はじめて妻の芳野が日記に登場するのは結婚後 10 日以上を経てからのことである。これに対して、第一子の長女が誕生したときは喜びとともに詳細な記述があり、弘安の日記にしては例外的な記述になっている。また、弘安の作品が受賞したことも、その多くが当日の日記に書かれている。

日記から書き手の生活史を再構成する試みには特別な配慮が必要だろう。米澤研究会では、第一の配慮として、弘安の日記のみから弘安の主観的態度を分析、解釈するのではなく、弘安の遺族への日記面接を実施し、また郷土史を収集してそれらを参考にしている。

##### 4.1 郷土史にみる米澤弘安の生活史

米澤弘安の生活史に関しては『加賀象嵌職人——米沢弘安の人と作品——』(田中 1974)と『かなざわ偉人物語④』(山田 2002)に詳しい。両文献とも弘安の受賞記録や、弘安の遺族にたいする面接を基にして、弘安の略歴を紹介している。ただし、両文献とも年月日や記述に誤植と思われる箇所があり、その箇所の訂正は弘安の日記本文中の記述を優先することにした。表 1 で弘安の略歴をまとめてみた。

米澤弘安(1887~1972)は石川県金沢市の象嵌職人である。先祖は代々白銀屋を称し、加賀藩の白銀細工・刀装金具職人であったが、父親の代で象嵌技術を習得し、姓も米澤に改め帯刀した。弘安は明治 22 年に次男として生まれたが、長男が金沢を去り名古屋で日本画を描くようになったこともあり、親を継いで象嵌職人になった。子供のころから父親は弘安に期待をかけていたと思われ、12 歳のころから父親から金工技術を習い始めている。また、弘安は学業成績がよく高等小学校を主席で卒業し、後に高等小学校の同窓会で中心的な役割を果たすようになる。17 歳のときには通信教育の帝国中学会に入会し勉強を続けた。娘の話では弘安は読書家であり、新聞も 2 紙購読していたという。

弘安は 30 歳で結婚し家督を相続することになるが、米澤家では父と弘安、弟の 3 人で象嵌の仕事をしており、おもに問屋や近所の顧客からの注文を受けていた。大きな仕事とすれば、大正 12 年に皇室関係の仕事を請けている。また皇族に作品を上覧、天覧する機会も何度かあ

表1 米澤弘安略年表

文政3(1820)	祖父（白金屋清右衛門）誕生	
嘉永4(1851)	父（6代清左衛門）誕生	
明治2(1869)	父清左衛門米澤姓に改め帯刀	
明治20(1887) 0歳	弘安、二男として誕生	
明治32(1899) 12歳	父清左衛門から金工技術を習う	
明治33(1900) 13歳	兄佐吉金沢を去り名古屋で日本画を描く	
明治34(1901) 14歳	金沢高等小学校首席卒業	
明治37(1904) 17歳	帝国中学会（通信教育）入会、翌年第一学年終了	日露戦争
明治39(1906) 19歳	石川県製品々評会（三等賞）	
大正1(1912) 25歳		大正政変
大正3(1914) 27歳		第一次世界大戦
大正4(1915) 28歳	父清左衛門サンフランシスコ・パナマ太平洋万国博覧会（銅賞）	第12回金沢市区総選挙
大正5(1916) 29歳	皇太子の行啓に際し作品を台覧に供する	
	美術工芸品展（三等賞、注：日記では二等賞）	
大正6(1917) 30歳	芳野と結婚	
大正7(1918) 31歳	茶（小習）の免除を取得	米騒動
大正8(1919) 32歳	長女喜代誕生	
大正10(1921) 34歳	石川県工芸奨励会通常会員に認定	
	美術工芸品展（三等賞）	
大正11(1922) 35歳	長男弘正誕生	
大正12(1923) 36歳	東京美術学校教授より皇太子成婚記念献上小屏風金具の製作依頼	
	父清左衛門歿	
	弟清二結婚	
大正14(1925) 38歳	二女登代誕生	
	パリ万国現代装飾美術工芸展（名誉賞）	
大正15(1926) 39歳	金沢市金属工芸同業組合設立に際し美術工芸部長	
昭和2(1927) 40歳	フィラデルフィア万国博覧会（大賞）	
昭和3(1928) 41歳	母きく歿	
	第九回帝展（入選）	
昭和4(1929) 42歳	三女信子誕生	
	第十回帝展（入選）	
昭和6(1931) 44歳	第十回美術工芸品展（三等賞）	満州事変
昭和7(1932) 45歳	金沢市から「支那事変」出征軍人の遺族慰問金募集協力の感謝状	
昭和11(1936) 49歳	閑院宮戴仁親王の來県に際し作品上覧	
昭和12(1937) 50歳	石川県工芸奨励会名誉会員	
昭和17(1942) 55歳	石川県から芸術家に認定	
昭和19(1944) 57歳	長男弘正戦病死（昭和21年に戦病死の報）	
昭和22(1949) 58歳	天皇陛下に作品天覧	
昭和23(1948) 61歳	三女信子結婚、米澤姓を呼称	
昭和24(1949) 62歳	第五回現代美術展（金沢商工会議所会頭賞）	
昭和36(1961) 74歳	第八回日本伝統工芸展（入選）	
昭和37(1962) 75歳	第三回伝統工芸新作展（奨励賞）、第九回日本伝統工芸展（入選）	
昭和38(1963) 76歳	第十回日本伝統工芸展（入選）	
	加賀金工振興会会長	
昭和39(1964) 77歳	日本工芸会正会員	
昭和42(1967) 80歳	第十四回日本伝統工芸展（入選）	
昭和43(1968) 81歳	金沢市文化賞	
昭和44(1969) 82歳	石川県指定無形文化財「認定書」	
昭和47(1972) 85歳	文化庁無形文化財「選定書」、勲五等瑞宝賞	
	弘安10月21日病没	

参考：『加賀象嵌職人－米澤弘安の人と作品－』、『かなざわ偉人物語4』

った。また、父と弘安は展覧会に作品を多数出品しており、その多くが賞を受けている。賞の種類は、地元石川県の品評会レベルからパリやフィラデルフィアでの国際的な賞までである。帝展にも昭和3年と4年に連続入選を果たした。娘の話では大正末から象嵌の仕事が減少し、家計は苦しくなったというが、妻が裁縫仕事で家計を支えてくれたこともあり(水越 2002)、弘安の作家としての活動は大正末から昭和初期にかけて輝かしいものがあった。

1930年の戦時体制に入ってから作家活動はわずかながら継続し、昭和17年(1942年)には石川県から芸術家に認定されている。ただし、弘安は自分が「職人」とであると生涯語っていたという(山田 2002: 60)。また、昭和7年(1932年)には出征軍人の遺族慰問金募集に協力したことで金沢市から感謝状を授与されており、戦時体制下では町内会長として活躍したという。

戦後、弘安は作家活動を再開し金沢の伝統工芸の担い手として中心的な役割を果たすようになった。1963年に加賀金工振興会会長に就任し、晩年には石川県指定無形文化財認定書(1969年)や文化庁無形文化財選択書(1972年)を授与されている。

#### 4.2 『米澤弘安日記』

日記は弘安が18歳の明治39年(1906年)の元旦から昭和47年(1972年)の晩年まで書かれた(400字詰原稿用紙換算で4,336枚に相当)。金沢市では日記の明治39年から昭和8年までの箇所を上・中・下・別巻の4冊(日記本文計2,227頁)で刊行した(2000年から2003年)。米澤弘安日記編纂委員会の編集方針は、日記をできるだけ忠実に再現することであり、誤記や当て字、弘安が日記本文中に付した「・」、「◎」、「○」、「△」等の記号もそのままの形にして刊行された。

米澤研究会では日記刊行後に弘安の日記をデータベース化し、共同研究を実施してきている。データベース化に際しては、弘安が付した記号に基づいて日記のテキストを分割し、エクセル形式でデータ総数34,980パラグラフの日記データを作成した(詳細については前号参照)。また米澤研究会では、日記を補足するデータも収集してきており、とくに弘安の妻子にインタビューを実施してきた(日記刊行後に弘安の娘から日記本文中の誤記や当て字を指摘されたが、これは日記のデータベースに反映させてある)。本稿は、弘安の日記と彼の娘への日記面接に基づくものであるが、とくに大正期に書かれた日記を中心に考察を進めることにする。

本稿のテーマの一つは、地域社会におけるエートス、とくに対面的な人間関係で重視されるエートスを検討することである。弘安にとっての「重要な他者」とは誰か、また地域社会の「一般化された他者」の態度とは何か、弘安の相互行為を分析することによって、金沢という地域社会に存続してきたエートスを読み取りたい。

ここで、弘安の日記を分析、解釈するときの留意点を述べておこう。研究者は日記データを

過去の歴史的条件として現在の視点から再構成することになる。その際、弘安のパースペクティヴを通して再構成される事実が客観的リアリティをもつと仮定する。弘安のパースペクティヴを越えたところに客観的な過去の事実(真の過去)の存在を想定しない(近藤 1997)。以下の考察では、弘安の日記から読み取れる事実を中心にして弘安の社会的世界を記述していく。

## 5. 金沢の地域社会の特色——同窓生との共同作業にみられるエートス——

データとして用いる日記は大正2年(1913年)から大正10年(1921年)までを中心とする。この時期は弘安が25歳から34歳のときであり、日記を通読してみると、日付、天気の記事からはじまり、多岐にわたる出来事が書かれている。弘安の生活世界の構造が日記を通して分析可能である。本稿では、多様な日記記述のなかから他者関係が問題になる社会的世界を取り上げ、弘安のパースペクティヴからみた地域社会の特色を分析し、そこに生きる職人弘安のエートスを引き出してみる。

### 5.1 社会的世界の多元的構成

他者関係の違いを基準にすると、日記には〈家族・親族〉、〈近隣・仲間〉、〈職人社会〉、および〈一般社会〉の問題が多岐にわたって記述されている。日記記述を領域別に分け、各領域における主な出来事を年表形式にまとめてみた(表2)。先の表1では日記以外の資料から弘安の略歴を作成したのに対して、表2では弘安の「いま、ここ」のパースペクティヴから社会的世界を追構成してみた。以下、表1と表2を対比させて、弘安の社会的世界の構成を年代別および領域別に概観してみよう。

まず、〈家族・親族〉で主要な出来事は、結婚と家督相続である。弘安は象嵌を家業として継承し、父親と弟の3人で象嵌の仕事をし、母親が中心となって注文や経理をみた。職人の家では家族の構成員が協同して生計を立てていたといえるだろう。また義父が上層(元士族)の襖職人であったことから、弘安は義父から援助を受けることになる。ただし、大正期の日記には資金援助の記述が直接みられない。日記には妻の実家からことあるごとに贈与があったことは記述されているが、娘の話ではその他にも義父は弘安が展覧会に出品した作品を購入するという形で資金援助をしていたという。家業という形で家と仕事結びつき、妻の実家も同様に職人の家であったため、〈家族・親族〉の領域と〈職人社会〉の領域が未分化である。

つぎに、〈職人社会〉で主な出来事は、弘安が作家として活躍したことである。弘安は近所の顧客や問屋からの仕事で生計を立てていたが、同時に、作家としての活躍や皇室関係の作品をつくるのが、弘安の名誉になっていた。大正期は仕事が一番忙しい時期であり、弘安は一般の仕事をすると同時に、展覧会用の作品も製作し、加賀象嵌職人としての地位を確立していく。一般の仕事では金沢の上層を顧客とした。また、作家活動は金沢の職人たちと金沢市の支

質的研究における分析と解釈 (II) (近藤敏夫)

表2 米澤日記にみる生活世界の構成と出来事の推移

	〈家族・親族〉 〈職人世界〉 直接世界 (Umwelt) 領域が未分化	〈近隣・仲間〉 直接世界 (Umwelt)			〈一般社会〉 同時世界 (Mitwelt) 金沢/石川/日本/世界
		(梅澤先生建碑)	(中越先生建碑)	鳥島社中/親交團 /その他	
大正 2 (1913) 26 歳		3. 25 病状記述 6. 25 死去 6. 26-30 葬儀等手伝い 7. 5 遺品の整理・分配 9. 3 法名の銅板作成	8. 17 叙勲祝賀会	1. 5 謡初で宴会 5. 10 白髭神社献灯で謡 10. 7 謡額奉納	2. 10-2. 13 大正政変
大正 3 (1914) 27 歳		墓参 (1) 未亡人訪問 (2) 未亡人来訪 (1) 通信 (1)	8. 15 同窓会開催話題 8. 23 同窓会開催	1. 10 奉額相談会の根回 2. 5 相談会もめる 2. 12 額板問題決着 (弘安が説得に一助) 11. 24 親交団結成話題	
大正 4 (1915) 28 歳	父, 国際博覧会銅賞	未亡人訪問 (2) 未亡人来訪 (2) 通信 (2)	7. 29 中越先生から同窓 会開催の知らせあり 弘安が出席者を募る 8. 16 同窓会開催	1. 20 親交団発会式 2. 16 親交団会費募金	3. 11-3. 24 金沢総選挙 (選挙違反)
大正 5 (1916) 29 歳		墓参 (1) 未亡人訪問 (1) 未亡人来訪 (1) 8. 27 墓を作る会合 (以後, 弘安は同窓生 の連絡, 調整に尽力)	8. 8 死去 8. 10 葬儀・玉井弔辞 8. 27 命日 8. 8 に同窓会 11. 9 建碑相談会 募金するが集まり悪い	2. 26 親交団新年会 不参加, 以後記述無し 4. 19 鳥島先生病氣見舞 5. 14 鳥島先生全快祝い	
大正 6 (1917) 30 歳	1. 1 美術工芸界発展 自宅象嵌仕事順調  11. 16 芳野と結婚	2. 19 石碑建立の話題 6. 6 建碑募金開始 6. 24 建碑予算案 6. 27 石碑設計依頼 8. 11 同窓会有志名石碑 11. 11 除幕式・追悼会	3. 24 選挙で募金中断 5. 19 建碑の候補地見学 5. 24 「話にもならない」 7. 21 銅像に変更案 9. 4 意見紛糾, 玉井立腹 9. 5 玉井と金沢市へ調整	6. 10 鳥島社中氷室会	1. 1 欧州戦のおかげ 美術工芸も景気良
大正 7 (1918) 31 歳	1. 1 一家の責任負う 家業に励む 兄弟へ財産分与予定	1. 23 未亡人年賀来訪	5. 16 同窓生の協力なし 8. 7 銅像の相談, 募金 10. 20 一次中断の方向	1. 7 鳥島先生本人から 新年謡会への誘い 6. 15 鳥島社中氷室会	1. 1 欧州戦で国運 皇恩厚く喜ぶ 8. 11-8. 26 金沢米騒動
大正 8 (1919) 32 歳	1. 1 父になる喜び 家業の発展を期す 弟清二の分家問題 4. 26 長女誕生	7. 15 墓参	1. 1 建碑実現への意欲 8. 8 北国新聞に建碑の 意見が掲載 (越村仁吉)	6. 15 鳥島社中氷室会	1. 1 欧州戦終結と日本の 幸運
大正 9 (1920) 33 歳	1. 1 弟清二分家嫁取 家業繁盛, 仕事選ぶ 香炉や置物の精巧な 仕事で新面目を期す	5. 31 未亡人訪問 (弟清二の縁談の件で) 8. 27 未亡人来訪 (弟清二の嫁の件で)	1. 1 建碑実現への意欲 8. 9 同窓会で建碑の経 過報告		
大正 10 (1921) 34 歳			2. 18 建碑発起人会 募金に期待せず, 発 起人 5 名が積み立て ることに (以後, 建 碑の記述なし)		

援を得て行っていた。金沢市内（旧金沢市内は徒歩圏内である）で仕事関係ができていたことから、仕事と近隣関係が未分化である。

〈近隣・仲間〉の領域では、弘安が近所の馴染みの顧客や問屋からの注文で生計を立てていたこと、また、地域の神社仏閣への参詣、年中行事やその他のイベントに積極的に参加していたことが日記から読みとれる。とくに、弘安は「同窓生」を中心とした集団で活動することが

多く、高等小学校の同窓生5人と定期的に「塩梅会」を開いており、晩年になってメンバーが亡くなるまで親密な交際を続けたという。弘安にとって最も大切なのは高等小学校の同窓生であり、とくに恩師の中越先生を核とした同窓会が弘安の活動の場になっていた。その他、弘安は弟の清二と珠算教習館に通っていたことがあり、教習館の恩師である梅澤先生夫妻やその同窓生とつきあいが長く続いた。同じく弘安は弟の清二と謡を習っており、謡の鳥畠先生やその仲間(鳥畠社中)と神社に謡額を奉納することがあった。小学校の同窓生、珠算教習館の同窓生、また謡の仲間(社中)など、弘安は同じ恩師の下で学んだ集団を核にして地域生活を送っていた。弘安の社会的世界は同窓生を核にして構成されていると考えられるが、この点に関しては、5.3節で検討することにする。

最後に、〈一般社会〉の出来事では、弘安は東京を中心とする大正政変、金沢の総選挙(選違反事件)、米騒動、第一次世界大戦(欧州戦)について新聞を基に日記を書いている。これらの出来事は弘安にとって関与すべき問題としては取り上げられておらず、傍観者的な態度がとられている。〈一般社会〉の問題に対して、弘安は新聞を読み、集会にも出向き、ある程度の意見や共感をもてるが、終始、傍観者的または受身的態度をとり、行動に結びつくことはほとんどなかった。

## 5.2 地域社会の重層性

弘安の生活世界は多元的構造からなるとともに、地域社会における各領域、すなわち〈家族・親族〉、〈職人社会〉、〈近隣・仲間〉の領域が重なっている。この3者はA. シュッツの直接世界(Umwelt)に対応し、〈一般社会〉は同時世界(Mitwelt)に対応する。データは大正2年から10年までを中心に抽出してあるが、とくに大正6年から9年にかけて元旦の日記記述に弘安の態度が圧縮されている。ごく稀にしか自分の考えを記述しなかった弘安が、年頭ということもあり、熟考の上に自分の考えを述べた箇所として注目される。その元旦の記述のなかに、弘安の社会的世界が重層的構造を構成していたことが読みとれる。

大正6年(1917)元旦には「欧州戦」(第一次世界大戦)における日本の位置の幸運を述べ、戦争景気による美術工芸界の活気と象嵌の仕事の発展に感謝している。つづく大正7年(1918)元旦もこの考え方は継続し、自身が結婚したこと、父親が病弱のため自分が一家を養う責任を負うことが記述されている。弘安は〈一般社会〉の動向と対応させて〈家族・親族〉と〈職人世界〉の出来事を記述しているが、仕事も順調であったことから前途洋々の記述の仕方である。そして、「國運隆盛にして皇恩愈々厚く、安穩に生活し得るは誠ニ喜ばざるべからず」(大正7年1月1日)とあるように、その喜びが天皇の恩と結びつけられていた。

同じく、大正8年(1919)元旦には欧州戦の終結と日本産業の発展を喜び、自身の象嵌の仕事を発展させる覚悟を記述している。また、第一子が誕生したこと、弟清二を分家させる義務を負うことが記述され、これに加えて〈近隣・仲間〉の領域の問題として「中越先生の銅像

建立」を実現させる決意が述べられている。大正 9 年の元旦も、弟清二の分家問題、象嵌の仕事が忙しいこと、そして中越先生の建碑を実現する決意が再度述べられている。中越先生の建碑は平成 8 年、9 年と元旦の決意として述べられていることから、弘安にとって同窓生と恩師の建碑を実現することが重要な目的であったことがうかがえる。ただし、梅澤先生建碑は大正 6 年 11 月 11 日に除幕式にこぎつけるが、中越先生建碑については日記記述のなかでも紆余曲折がみられ、大正 10 年 2 月 18 日を最後に建碑に関する記述がみられない。その後、中越先生の記述があるのは大正 15 年 8 月 8 日の中越先生の追悼会の記述のみであった。中越先生建碑が立ち消えになった経緯を日記記述で追ってみると、弘安の態度や人柄がより鮮明に浮かび上がってくる（次節で検討）。

弘安の社会的世界の特徴は、直接世界の各領域における対面的な人間関係が他の領域でも共通の人物から成っていることである。弘安の直接世界は重層的な人間関係からなり、その人間関係が生計と密接に関連している。これは伝統的な職人家族を取り巻く直接世界の典型的パターンであろう。弘安が最後の「加賀象嵌職人」として生涯を終えることができたのも、このような人間関係を形成、維持することができたからであると考えられる。

以下、社会的世界の中でも〈近隣・仲間〉の領域から大正期金沢の「同窓生」を取り上げ、「同窓生」を中心とする人間関係が社会的世界の構成の基本になっていることを示したい。

### 5.3 同窓生を中心とする人間関係の形成

弘安の日記記述は備忘録的で簡潔なものが多いが、そのなかでも比較的詳細な記述がなされている出来事に、亡き恩師の石碑を同窓生と建立するという一連の記述がみられる。そこで、日記データベースから恩師の建碑に関する記述を抽出し、弘安の「いま、ここ」のパースペクティヴから「事実」経過を追ってみた。そこから読み取れることは、同窓生との恩師の建碑という共同作業が、弘安の人柄や生き方を知る上で重要な出来事であるということである。この段階での分析は、日記本文中の言葉を鍵概念にすることによって、弘安自身による一次的意味構成を追構成することである。

先の表 2 では、日記記述を基にして、地域社会における弘安の生活世界の構成と出来事の推移をまとめ、地域社会の領域ごとに出来事のストーリーを作成した。表 2 にあるように「恩師の建碑」は大正 5～10 年を中心に記述されている。具体的には、珠算の梅澤教習館の恩師の建碑と高等小学校の恩師の建碑の 2 つが同時進行している。また、大正 2 年には謡曲の集まりである鳥畠社中で神社に謡額を奉納している。学校、珠算塾、謡曲仲間（社中）など、レベルはさまざまであるが、「同窓生」というモデルは同じ場で学んだことを重視し、そのことを人間関係の恒常的維持に結びつける態度である。弘安の社会的世界の構成原理は「同窓生」の関係を中心にしていることである。以下、「同窓生」もしくは同窓生と類似した関係が、大正期の地方都市金沢で生計を営む職人には必要であったことを示してみよう。



なお、以下の日記分析では、テーマに応じてデータベースから日記記述を抽出し、その抽出群にメモ書きやコードを記入する方法をとった。具体的には、人間関係に焦点をあて、弘安の相互行為のパターンを第一のコードとし、弘安と関係する他者の類型を第二のコードにした(表3)。ただし、2つのコードとも固定した分類ではなく、作業過程で再コード化されるものである<sup>(1)</sup>。

それでは、まず「同窓生」と協同して恩師の建碑を実現した例を日記記述から紹介してみよう。弘安のパースペクティブから「梅澤先生建碑」の一連の出来事を記述すると以下のようになる(表2参照。表3では梅澤先生建碑のデータ群は省略してある)。

弘安は日記を書き始めた18歳の頃(明治39年)には、梅澤儀三郎の珠算教習館に通っていた(明治39年には珠算教習館に通った記述が8回ある)。明治42年の21歳の頃には教習館を終了していたと思われるが、毎年のように梅澤宅に年賀に訪れ、新年会や同窓会、運動会などに出席している。同窓会や運動会には同窓生の家族も参加し、景品やお菓子が配られる盛大なものであった(日記記述では参加者が100人を超えている)。弘安は教習館の同窓生のなかでもとくに梅澤先生と付き合いがよかったらしく、梅澤先生のところに「顔を出す」、「一寸寄る」という記述が散見される。21歳(明治42年)から24歳(大正元年)まで毎年6回ないし7回の訪問が記述され、梅澤先生と歓談している記述がみられる。ただし、大正元年9月20日以降、しばらく訪問の記述がなくなる。再び、梅澤宅への訪問が記述されるのは大正2年3月25日であるが、このときは梅澤先生の病状が記載されている。それから4ヶ月後の6月20日に梅澤先生は病死し、その後、弘安は葬儀の手伝いや、遺品の整理・分配、法名の銅版作成と、故梅澤先生のために尽力している。

梅澤先生の死後も、弘安は梅澤未亡人との往来を日記に書いており、毎年のように故梅澤先生の墓参の記述、梅澤未亡人への訪問の記述、また梅澤未亡人が米澤宅を来訪した記述がある。大正5年8月27日に梅澤先生の墓を作る会合の記述、大正6年2月19日に石碑建立の話題が記述され、同年6月6日から募金開始、6月24日に建碑予算案を立て、8月11日の建

表3 中越先生建碑データ抽出群(一部抜粋)

年月日段落	記 述	メモ	相互行為	他者
大正5年 8月10日 01	・元長町高等小学校々長中越錠三郎氏ハ吾等の恩師なり 今ハ野町校長なりしか八日逝去せられ本日午后一時葬儀と云ふので僕も参詣すべく出掛けた 折しも少し雨降り出せり 葬儀ハ時刻通ニ出棺する 玉井君ニ逢ふ 帰澤してより直ニ白山へ行き約二週間居て七月ニ帰つたと 寺町の高岸寺(妙興寺)ニ移しにて終りて泉火葬場ニ送らる 西村君桑原君も参詣して居られた 玉井君ハ寺にて元長町高等小学校同窓會總代として弔辞を讀まる 帰路ハ玉井君と共に話して来る 水邊方へ寄り貸家の事を尋ね、又風呂敷を借りて僕の風呂敷を玉井君ニ借し羽織を包みて帰る 同窓會を二十一日ニ催すと云つて居た	中越先生葬儀 で同期親友の 玉井が同窓会 総代の弔辞	葬儀参列 親友会話 羽織貸す 会合伝達	恩師 同窓生 同期 玉井

質的研究における分析と解釈 (II) (近藤敏夫)

大正 5 年 8 月 21 日 05	・夜 僕は舊長町小学校同窓会に行く 先生生徒共十七名 先生半数あり 変な会となった 然し快話し和氣愛々中二 十一時半散會した	同窓会で同窓 生よりも先生 が多い変な会	同窓会	恩師 先生 同窓生
大正 5 年 8 月 21 日 06	・北川先生か包物を忘れて行かれ玉井君か持つて行く 安 井, 西村, 越野君等と待って一時半帰る 上野君ハ大ニ酔ひ 俤で帰す 毎年八月八日即中越先生命日ニ開會する事ニした	毎年命日を例 会とする	同窓会	先生 玉井 同窓生 恩師
大正 5 年 10 月 1 日 04	・安江君か来て玉井君より久保君方へ来た葉書に長町高小校 の卒業生人名簿を借る事を少将町校々長佐久間先生及佐々木 先生ニ依頼状を出して置いたから誰か二人程行って呉れとの 事で僕にも行つて呉れないかとの事 僕も此頃多忙なれば勝 手ながら君等二人にて行って呉れと頼む (后ニ)	卒業生名簿を 借りる依頼 弘安は多忙で 断る	依頼 挨拶拒否	同窓生 玉井 先生
大正 5 年 10 月 25 日 01	・夕 安江町の久保君が来て今夜西村君方へ寄りて中越先生 石碑ニ付相談したき故出席して呉れとの事で夜, 天満宮へ参 詣して安江君を問ふと病氣であるとの事 久保君方へ行き共 ニ堅町西村君方へ行く 時ニ七時, 待つ程ニ参る人ハ笠間君 越野君 外ニ安田君 吉田君て此ニ氏ハ程なく帰られた 東京の玉井敬泉君より西村君へ来た手紙ニ石碑の事ニ付希望 を書いてありを見た 大方ハ賛成にて具体的の談ハ□らさり しか 来ル十日頃ニ世話人の總會を開きて協議を開きいよいよ 活動を始むる事ニ決し後ニ御馳走か出て十一時散會し同道 にて帰る 久保君と西村君ハ明日小橋町へ佐々木先生を問ひ 名簿の急調を依頼し僕は玉井君へ送る報告を出す事ニなつた	建碑の相談会 中越先生建碑 の世話人: 安 江, 久保, 西 村, 笠間, 越 野, 安田, 吉 田, 玉井	会合 訪問 通信 会食 依頼 報告	同窓生 恩師 玉井 先生
大正 5 年 10 月 26 日 01	・玉井敬泉君へ昨夜西村方にての集會の模様を報告する事を 約して来たから昼休ニ書くべく尚落選の事ニ付奮勵の手紙も 共ニ書き中越先生石碑の趣意書を依頼し参考として梅澤先生 の時のものを同封して送る 五匁ありき 三時頃迄掛つたが 古田様か来られて話して居ると半日休業したやうな譯だ (后 三ー四半)	玉井に中越先 生建碑の趣意 書を依頼, 梅 澤先生建碑の 趣意書を参考 として同封	会合 通信 依頼	玉井 同窓生 恩師
大正 5 年 11 月 2 日 02	・玉井敬泉君より手紙来り 趣意書と書き来る (前九) 之 を持って久保君を商業学校ニ問ひ, 之を渡し尚吉田三郎氏を 問ひて額面原型製作の依頼をせねばならぬが久保君ニ行かれ ないかと問ひしニ三時頃迄手がすかないとの事で中止す	玉井から趣意 書	通信 依頼 相談	玉井 同窓生 芸術家
大正 5 年 11 月 2 日 03	・今夜久保君方へ寄るとの事であつた 午后三時頃玉井君より 石碑の設計圖が来たから之を持って夜八時頃より久保君方へ 行く 程なく安江君, 西村君笠間君が来たから来る五日幹事 總會の席上話の順序ハ安江君か書き全會招集文ハ僕が拙いの を作り久保君笠間君僕の三人にて約三十枚の葉書を書き十二 時頃終りあとは打合にて一時帰りたり	玉井から石碑 設計圖 幹事 總會の役割分 担	訪問 通信 打合せ 役割分担	同窓生 玉井
大正 5 年 11 月 5 日 01	・午后昼飯後直ニ出掛け久保君方へ寄り不在なり 本日會合 の香林堂へ行きしか誰も来て居ない 百姓町の友田方へ香炉 蓋の代を取二行き, 十六円の小切手を貰ひ再び香林坊へ来ると 二三人来て居られたか主の人か来ない 西村君か近いから 呼二行くと, 石屋へ石碑設計圖を取二行って呉れと云ふ 川 除町の神田と云ふ石屋へ取二行き帰りニ寄るとまた家ニ居る 香林堂へ来ると久保君か来て居る 追々来て話を始め賛成 の決果再世話人の選定す (各区ニ別ち) 次ハ九日夜集りそれ 迄ニ趣意書の印刷を終り世話人ニ分配して配達せしむ事ニ相 談す 来會者ハ並木町の岡部君 白寺寺町の野市君 富本町 の横江君 堤町の槻君 其他西村 久保 安江 小生の八名 なり 薄暮散會して野市君 岡部君ハ帰り他の六名ハ西村君 方へ行き二番 巻絹, 藤戸を誂い夕食し雑談して九時辞し十 時帰る 帰りて手紙を認め玉井君ニ報告す 十二時寝る	主な人か来な い会合 總會: 岡部, 野市, 横江, 槻, 西村, 久 保, 安江, 米 澤の八名出席 再度世話人選 定	訪問 会合 選定 相談 通信	同窓生 玉井

碑相談会で石碑の裏に「故梅澤教習館同窓會有志と誌す」ことが決まっている。こうして大正6年11月11日に梅澤先生石碑の除幕式が行われることになった。弘安は除幕式の後も梅澤未亡人との往来を続けており、弟清二の縁談話にも梅澤未亡人は関与していたことがうかがえる(大正9年まで往来の記述あり)。

日記記述から弘安は梅澤教習館で珠算を習ったことを契機にして、教習館を終了した後も梅澤先生と交流が続いていたことが分かる。これは他の入館者たちの多くも同様であり、梅澤先生の死後3年経って墓を作る話題が記述され、その後、同窓生による建碑の事業は順調に進み、梅澤先生の石碑建立を実現させている。石碑建立に際しての弘安の相互行為のパターンをみると、梅澤未亡人への「訪問」、梅澤教習館の「名簿作成」、発起人たちとの「相談」、「協議」、「連絡」を頻繁に行ない、建碑の「募金」に走り回っていた。また、同窓生で募金の役割を遂行していない人を「甚だ冷淡だ」と非難し、募金の担当地区を弘安が代わってすることになった記述もある。

梅澤先生建碑のデータ群から読み取れるのは、弘安の態度や行動が人間関係を恒常的に維持することに向けられていることである。伝統的価値としては恩や義理を重視する態度があるといつてよい。例えば、恩師が亡くなった後も梅澤未亡人と長くつきあいが続くことにみられるように、弘安は恩師の死後も未亡人を通して恩師との人間関係を維持したのである。恩師の石碑建立という事業も、人間関係の恒常的維持を象徴的に表す出来事であると解釈したい。

つぎに、恩師の建碑が立ち消えになった例をとりあげよう(表2および表3参照)。高等小学校の恩師である中越錠三郎先生の建碑は、規模的に梅澤先生の建碑の事業を上回る大きな事業であったと考えられる。弘安は中越先生と交流を続けており、中越先生の叙勲祝賀会(大正2年8月17日)を契機にして翌年から同窓会が開かれている。中越先生が弘安に同窓会の開催を催促することもあったようで、同窓会の連絡係としての位置に弘安はいたようである。大正5年8月8日に中越先生が死去すると、弘安は同窓生のなかの第一の親友でもあり、仕事上のつきあいもあった日本画家の玉井敬泉と恩師の石碑建立の事業を始める。玉井(東京在住)が趣意書を書き、弘安がその趣意書をもって同窓生に依頼するという形態である。弘安は同窓生との「会合」、「会食」、「相談」、「通信」、「訪問」、「打ち合せ」などの活動をし、また市役所や関係各所への「依頼」、「訪問」も頻繁に行っていた。

弘安は中越先生建碑に多くの時間を割いていることが日記からうかがえる。ただし、中越先生建碑事業は当初から「主な人か来ない」会合であり(大正5年11月2日)、選挙のための募金中断があり(大正6年3月24日)、石碑から銅像への変更案が出され(大正6年8月7日)、銅像変更案で意見が分かれたり(大正6年9月4日)、紆余曲折の経緯をたどる。同窓生からの協力が得られないことへの心配(大正7年5月16日)や、同窓生4人で一時中断することに決めたことが記述されている(大正7年10月20日)。その後、大正8年と大正9年の元旦に弘安は建碑実現の意欲を述べているが、大正10年2月18日に同窓生5名で新たに

銅像発起人会をもつことが記述されてから中越先生建碑は立ち消えになっていく。同日の日記には「結論は、他の人達は頼むに足らない 発起人が結束し主なるは金故、吾等五人にて毎月三円を積立て、約二か年間継続せば五百円の金を得る 募集金の不足は之にて、補ふ事ニ決す」とあるように、他の同窓生たちの合意を得ることができず、最後に残った同窓生 5 名では実現ができなかったことがうかがえる。

中越先生建碑のデータ群からも、梅澤先生建碑データ群と同様に、弘安が人間関係の維持に尽力していたことがうかがえる。ただし、梅澤先生建碑は規模が小さく、同窓生の仲間内だけで事業を達成することができたが、中越先生建碑は金沢市との調整も必要な大事業であったと思われる。中越先生建碑の代表者は当初、弘安の親友の玉井であり、弘安は二番手の位置で「連絡」、「募金」、「依頼」などの作業を精力的にこなしていた。結局、玉井を含む同窓生 5 人が新たな発起人会をもつが、建碑事業は立ち消えになる。弘安の苛立ちが日記記述には散見され、当初から募金に応じない人を「又金を出さぬ事を考へて居らる 仕様のない人だ」(大正 5 年 11 月 17 日)と非難する記述もみられる。弘安にしてみれば同窓生が恩師のために協同して建碑を実現することが当然のことであり、それが実行されないことに対する苛立ちが日記記述には現れているのである。

#### 5.4 地域社会における「重要な他者」

高等小学校の恩師の建碑、また珠算教習館の恩師の建碑に、弘安は東奔西走している。ここで、G. H. ミードの理論を応用し、弘安が「重要な他者」との相互行為を通して恩師の建碑を実現していく過程を分析、解釈し、さらに金沢の地域社会における「一般化された他者」の態度を再構成してみよう。

弘安は恩師の建碑以外の出来事でも同窓生と生涯、関係をもっている。中越先生建碑で最後に残った 5 人のメンバーが「塩梅会」と称して生涯つきあうことになる。弘安は彼らを「重要な他者」とし彼らの態度を取得しながら地域社会の役割を担ってきたと考えられる。弘安にとって「重要な他者」は生活世界の各領域で重複がみられ、「父」、「母」、「弟」、「兄」、「妻」、「義父」は〈家族・親族〉と〈職人世界〉の領域で重複し、「玉井(高等小学校同窓生)」は〈近隣・仲間〉と〈職人世界〉の世界で重複している。また、顧客が金沢の上層に多く、弘安は彼らと直接会って仕事を請けることが多かったため、〈近隣・仲間〉と〈職人世界〉の領域が重複している。

弘安の「他者の態度取得」の特徴は、家族や親族、同窓生のなかの「重要な他者」の態度を取得して、誠実、勤勉に利他的な行動をとるところにある。弘安の場合、家族や親族、同窓生という同質な他者との相互行為で生活が成り立ってしまう。そのため、それ以外の者が「重要な他者」になることがほとんどない。金沢の米騒動の際にとった態度にみられるように、弘安は「異質な他者」の態度を取得することはなく、異質な他者に対して線引きをしている(坪田

2006)。その第一の理由は、利害関係の面で異質な他者と相互行為をもつ必要がなかったからであろう。

## 5.5 弘安にとっての「一般化された他者」の態度

弘安の「一般化された他者」の態度は、普遍的な「一般化された他者」の態度へと再構成される方向にはない。これは、弘安が家族・親族や「同窓生」を典型とする内集団の成員に「共通の態度」をもつにとどまったからであろう。

弘安は新聞を2紙も定期購読するくらいに勉強家、読書家であり、政治・経済の情勢にも詳しく、世界的な視野に立って自らの職業と家族の生活の自立を考慮した人物であった。道徳訓、箴言などを弘安なりに解釈し、取り入れることも多く、日記にも一般的な生活態度のあるべき姿が記述されることが多かった。しかし、その態度は、家族・親族、「同窓生」以外の他者との相互行為では、思考のレベルにとどまり、行動として現れることがなかった。地域社会のなかで異質な他者の態度を取得して行動することがないため、地域社会の多元性に対応した「一般化された他者」の態度が形成されなかったのである。

「一般化された他者」の態度に異質な他者が含まれていないため、弘安は地域社会を超えた近代市民の普遍的態度を持ち得ない。この例は、大正政変後の金沢市区総選挙時（大正4年3月）の弘安の態度にみられる（坪田 2006）。すなわち、弘安は大正デモクラシーを支持する考えを記述し、反政友会系の候補者を支持した。だが、その候補者の選挙違反が問題にされたとき、そのことをまったく取り上げていない。それは、その候補者が弘安の父親の代から仕事を請けていた顧客Aであったからであろう。従来からの人間関係を維持することが弘安の生活の基盤になっているため、その相手を批判することができないのである。また、金沢の米騒動のときも、弘安は「下層民」の困窮に同情を示しはするが、行動にはいたらない。このときも米騒動で批判の矢面に立たされた人物が弘安の顧客Aであったからであろう。金沢の地域社会で職人として生きる弘安が、顧客との人間関係を破棄してまで自分の考えを表明したり、行動したりすることは考えられない。弘安は上層階級にも下層民にも属していないが、下層民と自己の間に線引きをし、そのことによって上層階級を内集団化することになった。そうすることによって弘安は仕事を続け、生計を維持することができた。それゆえ、一庶民の職人弘安は「異質な他者」の態度を取得したうえで、「一般化された他者」の態度を再構成することはなかった。境遇が似ている場合は異質な他者に共感することはできるが（金沢米騒動の場合）、自分の仕事と家族の生計を維持するために人間関係を温存することが優先されたのである。弘安の態度は他者との人間関係に左右されており、独立した人格になれきれないという意味で限界があった。

## 5.6 地域社会におけるエートス

弘安の日記から読み取れる地域社会の生活倫理は「お世話になった人に恩を返す（恩師の建碑）」、「同じような立場の人は同じことをすべきである（同窓生で寄付をしない人を非難）」というものであり、人間関係の維持そのものが生活倫理になっている。

ただし、生活倫理そのものはエートスではない。エートスとは個人を内面から倫理的価値の実践に向かわせる原動力であり、弘安がはっきり認識しているとは限らない。その原動力は「生計を維持し、家を守る」という利害関心と結びついている。弘安の収入源は近所の顧客や問屋からの注文を受け、相手から直接お金を得るという形態である。集金を母や他の家族がすることはあっても、弘安自身が顧客との対面的な相互行為のなかで仕事をし、収入を得ている。その相互行為の相手が親族や近隣に住む人間である以上、人間関係の恒常的維持は弘安が職人として自立するためには必要不可欠であった。弘安の場合、さらに展覧会用の作品を製作するという作家としての名誉もある。弘安は一般の仕事に「弘安」と号を入れることができる象嵌職人だった。弘安の場合、利害関心と名誉が一緒になって人間関係の恒常的維持という生活倫理の実践に向かわせたといえよう。また、「恩師の建碑」に東奔西走することは地域社会における生活倫理を自ら実践することになるとともに、他者にそれを強要する実践にもなった。

## 5.7 「同窓生」にみる権威主義的態度の変容

弘安にとって「同窓生」は同じ恩師の下で学んだ集団であり、年齢と性別を同じくする者である。同じ恩師の下で学んだというだけなら、年齢と性別は関係がないはずであるが、弘安の日記には女性は出てこなし、同期生以外の者もほとんど同窓生として出てこない。さらに、「同窓生」には多様なメンバーがいたはずであるが、日記に登場するのは金沢の地の者の子弟であり、商人や職人が多い。つまり、弘安にとっての「同窓生」は年齢、性別、生まれ、職業が同一であることが基本であった。中越先生建碑のエピソードで最後まで残った5人のメンバー（塩梅会）がまさに弘安と同質の者たちであった。このような同窓生の関係は地域社会に古くから残る年齢階梯制と類似しており、年齢、性別、出身、職業等による違いを前提にしているからこそ、それらを同じくする者が集団を形成できるという側面がある。属性の違いによって集団が形成されるため、集団を異にする者にたいしては権威主義的關係が生じやすい。しかし、弘安は権威主義的態度から同窓生の関係を重視したのではなかった。

弘安にとっては家を存続させることが第一の目標であり、作家としての作品を制作することが第二の目標であった。弘安はその範囲内で仕事や地域の活動をしていた。家族内で個人が独立していないため、生計の面で妻に依存することに疑いがなく、夫にとって妻は生計維持のための資源の一つであった。近代の日本では個人が独立することがないまま、経済的、政治的に「自立」することが求められた。集団主義のなかの自立とは、自己の責任で生計を維持し、家

を守ることを意味したのではないだろうか。生計を維持し、家を守るための資源が、「仕事」と「妻」と地域における「人間関係」だったのである。

弘安の縁談話は役所勤めの人や学校の教員ともあったというが、弘安は職人の妻は職人の家からがよいと考えていた。職人弘安にとって、最初から「妻」は家を守るための資源の一つであった。また、実際、芳野という妻の存在と働きが、弘安をして生涯、加賀象嵌職人として生きることを可能にしたと考えられる(水越 2002: 45-47)。この意味で弘安は芳野との夫婦関係を維持するために権威主義的態度をもてなかったのではないか。実際、家や仕事を離れた娯楽の領域などで弘安と芳野は当時としては珍しいくらいに行動をともにしている(映画を一緒にみにいったり、外に二人で出かけたり)。

弘安には家父長的権威主義から抜け出す契機がみられる。ただし、弘安の態度とは別の次元で家(家業)が権威主義的關係から構成されているため、妻が夫の補助の位置にしかねず、結果的に、弘安は芳野に権威主義的態度をとったことになるかもしれない。

また、同窓生を中心とし、町内会などの活動に東奔西走する弘安であればこそ、地域社会で生計を立てるための信用を得られたとも考えられる。弘安は地域社会の権威主義的人間関係を維持するつもりはなく、地域社会における互惠的人間関係を維持しようとしていた。しかし、これも弘安の態度とは別の次元で地域社会の権威主義的人間関係を維持することに帰結したのではないか。

大正期には金沢以外の地域でも、権威主義的人間関係が色濃く残存していただろう。地域社会は階層別の集団に分かれており、上層階級は他のすべての集団を支配する位置にいた。上層以外の集団は、階層によって細かく分断されているため集団間の交流がなく、直接的な支配・服従の関係にはなかった。弘安のような中間層は自分の生活をまもるために、中間層の人々との人間関係を維持しようとした。また、中間層は保身のために下層民と線を引いて、結果的に上層階級に与することになり、権威主義的人間関係の維持に貢献することになったのである。

## 6. 伝統の再構成の可能性—社会的合理性の条件と限界—

『米澤弘安日記』の恩師の建碑の記述には、恩の重視、同窓生との協議と合意、筋の通し方、正当性の社会的承認(金沢市からの承認)の獲得など、弘安が理にかなっていると考えている行動、態度、価値観がよく表れている。それらは、シュツ的な意味で、当該社会の成員にとって合理的なエートスであるといえる。それらのエートスを内藤莞爾、櫻井庄太郎、川島武宜、その他の先行研究の概念を用いて再構成してみたい。内藤、櫻井、川島等の先行研究は明治、大正、昭和初期の日本人のエートスを扱った研究であるが、それらをさらに富永健一その他の現代的視点を取り入れて再構成する。この段階での分析、解釈は研究者による二次的意味構成に相当する。表4で近藤の解釈図式を示したが、二次的意味構成に用いた図式につい

ては近藤の別稿を参照のこと<sup>(2)</sup>。

### 6.1 集団の「閉鎖性」の克服へ

日本の「義理」は集団内の倫理にとどまるが、「恩」は集団を超えうる倫理として重要である。日本の伝統的集団主義では集団の閉鎖性と開放性が並存すると考えられる。日本では集団外の他者に対しても恩を受けたり恩返しをしたりといった関係がみられる。恩によって可能となる集団の「開放性」が人間関係の「相対性」を生かすためには要請されるのである。

ただし、大正期金沢では血縁、地縁、同窓（学縁）によって閉じた集団が形成されていた。集団は分化しておらず、相互に重複して個人の生活全般にわたる人間関係に影響を及ぼしていた。集団内の成員間では権威主義的態度を克服して互恵の関係が成立しやすかったと考えられる。ただし、外集団に対する閉鎖性が強いと、同一地域内であっても集団間には互恵の関係は成立しにくく、結果的に権威主義的關係が存続した。

### 6.2 正当性の社会的承認

伝統的集団主義では、特権集団が非特権集団の自己主張に対抗するために支配の正当性を証明する必要がある。弘安は特権集団にも下層の非特権集団にも属していない。いわば今日の中間層に属する。ただし、中間層の成員が「下層民」に対して線を引き自分と距離をもたせることは、結果として上層階級の支配の正当性を支持することになる。弘安にとって日本人の「一般化された他者」の態度は天皇に具現化されていた。「天皇」は民の意志を象徴すると考えられるため、どんな場合でも「天皇」に非難が向かうことがなかった。弘安にとって「天皇」は日本人の「同質性」を象徴する存在であり、忠孝連続体（ベラー 1985）の頂点に立つ父親、すなわち正当性の源泉であった。また、弘安は皇室の仕事をしたり、上覧、天覧の榮に浴したりしており、天皇の恩恵を直接受けていた。弘安が普遍的市民としての態度を得るためには、抽象的な「天皇」に代わって、具体的かつ自覚的に一般の人々による正当性の社会的承認を得るようにならなければならなかった。

### 6.3 社会的合理性の条件

弘安の日記は日本の近代における社会的合理性のあり方を検討するための好材料になる。ここで、社会的合理性とは、集団主義の伝統を再構成して得られる研究上の概念である。社会的合理性の特徴は、(a) 人は自分が掲げた目的の正当化とその達成のために最も適した行動をとり、(b) 目的の正当性は一般の人々によって承認されなければならない、という2点である（板谷・中嶋 1995: 11-2）。

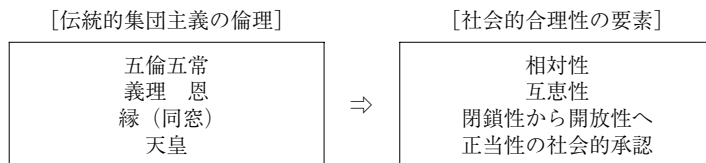
近代個人主義では相手の属性にかかわらず同じ行動をとるべきであるが、集団主義では自分と相手の立場によって相対的な人間関係が規定され（年齢、性別、身分など）、その人間関係



に対応して為すべきことが決まってくる。個人が絶対的な原理、原則をもっていないため、相手によって取るべき行動が異なる。近代個人主義の根本が個人の自立と自己実現にあるとするなら、集団主義の根本は人間関係の相対性にある。現在の日本で集団主義が残存し続けると考えるなら、日本的近代の成立には、「自立」と「自己実現」を前提にしつつも、この人間関係の相対性を生かし、社会的合理性を実現することが必要である。

社会的合理性では、集団内での特定の他者との相対的人間関係や互惠的人間関係が重視される。性別規範や年齢規範にみられる権威主義的な人間関係が克服されるなら、集団主義もその成員にとっては合理的になりえと考える。伝統の再構成から社会的合理性へという方向は、儒教ルネッサンスの観点から現代日本を考察する場合に成立する、ひとつの方向性である。

表 4 人間関係を規定する伝統の再構成



#### 6.4 社会的合理性の限界

集団を超える社会的合理性は近代の日本では成立していない。集団主義の弊害として、集団内の権威主義的人間関係、集団間の権力関係、集団の閉鎖性が考えられる。集団が開放的になれば、集団内の社会的合理性は集団の外の人にとって不合理または非合理的なものになる。合理性という概念に何らかの普遍性が内包されるものとするなら、近代の地域社会における社会的合理性は普遍性を持ち得なかったという意味で決定的な限界をもつ。

本稿では、社会的合理性が成立するための条件と、また社会的合理性がもつ限界とを視野に入れて、地方都市金沢の地域社会に生きた職人のエートスを検討した。

弘安の日記から社会的合理性を実現するための条件として、以下の 3 つが考えられる。

- (1) 集団内の権威主義的態度を克服する (互惠性)。
- (2) 異質な「他者の態度を取得」して集団の閉鎖性を克服する (開放性)。
- (3) 多様な他者の態度を取得して「一般化された他者」の態度を形成する (正当性の社会的承認)。

弘安には (1) の萌芽がみられる。ただし、(2) については、弘安の「同窓生」を重視する態度が、異質な他者を認めない態度に結びつく。また、(3) については、「天皇」が日本人の「一般化された他者」の位置にとどまっている。大正期、地方都市金沢に生きた弘安にとって、異質な他者 (他者の異質性や多様性) を許容できないことが、社会的合理性の形成を阻んでいた。集団主義の閉鎖性が社会的合理性の限界になっていたのである。

〔注〕

- (1) 再コード化の契機としては、先行研究の概念図式の受容と、米澤研究会の共同研究者との討論や学会での討論が考えられる。表 3 に掲載しているコードは米澤研究会と日本社会学会での討論を参考にして修正した。コード化は研究者の視点からする意味づけになるため、それを日記から得られる対象者の主観に当てはめてよいかどうか、という問題が生じる。解釈学的循環が不可避なら、分析や解釈の過程でコードを再構成していくが必要になる。
- (2) 大正・昭和期の職人のエートスを明らかにすることが本稿の課題である。エートスを抽出する方法として、まず先行の文献研究から予備的図式を作成し、その図式からエートスの構成要素を推測する。そして、その構成要素に米澤日記の内容が適合するかどうか尺度を構成して検証する。内藤莞爾 (1941), R. ベラー (1957), 中嶋航一 (1995), 富永健一 (1998) らは、西洋近代のエートス (M. ウェーバー) と対比させながら、日本人や東アジアのエートスを検討している。彼らの論議を参考にして予備的図式を作成することにする (近藤 2001, 2002 参照)。

〔参考文献〕

- ベラー, R. 1985 「ペーパーバック版まえがき」, 池田 昭訳『徳川時代の宗教』岩波文庫 1996
- 板谷 茂・中嶋航一他 1995 『アジア発展のエートス』勁草書房
- 川島武宜 1951 「義理」, 『思想』9 No. 327 岩波書店, pp. 21-28.
- 近藤敏夫 1997 「ミードの時間論」『G. H. ミードの世界』船津衛編著, 恒星社厚生閣.
- 近藤敏夫 2001 「日韓中における青年の集団主義的態度—家族と親族集団における相対的態度を中心に—」, 『日・韓・中における社会意識の比較調査』佛教大学総合研究所紀要別冊, pp. 23-40.
- 近藤敏夫 2002 「生活倫理と職業倫理の持続と変容」, 『民族関係における結合と分離』谷富夫編著, ミネルヴァ書房.
- 古屋野正伍・青木秀男 1995 「日記における『個人対歴史』の問題」, 『人間科学論究』3, pp. 65-76.
- 水越紀子 2002 「日記分析における『書き手と〈他者〉の関係』」社会学研究会『ソシオロジ』47 巻 1 号 pp. 37-53.
- 内藤莞爾 1941 (改稿 1964) 「宗教と経済倫理—浄土真宗と近江商人—」, 日本社会学会年報『社会学』vol. 8, pp. 243-286
- 櫻井庄太郎 1961 『恩と義理—社会学的研究—』アサヒ社
- 坪田典子 2006 「加賀象嵌職人の近代—日記に見る政治意識—」『文教大学国際学部紀要』16-2 号 pp. 55-68.
- 坪田典子・水越紀子 1999 「近代都市職人の生活世界」日本都市社会学会『日本都市社会学会年報』17 号 pp. 127-143.
- 富永健一 1998 『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社学術文庫
- 山田二郎 (編) 2002 『かなざわ偉人物語④』金沢市立泉野図書館

(こんどう としお 現代社会学科)

2005 年 10 月 19 日受理